江戸紫總角物語

九

へ 13
3562
5

萬屋助六
三浦屋総角
江戸紫三人同胞　五編　種彦

戸口にたちかくれて。今朝竹輿に乗りへける。雛妓が顛末聞。さればこそ
あらんと心得しが。おもひきや武家に則助六君の隠家にて武小
女およそ侍女後瀬なるべしとは。直ぐにかけいりつゝまほひもせまれ
しく名ひしが。妾武場に来れるは。関屋どのも面白く。殊に何屋ごく
ゆくうちひとる後瀬どの。久しぶりにて逢ふがなしけれ。いとゞ歎きを
そむる道理と。おもふなるきふゆの蟋蟀。壁によりて泣居しぞ
ゐ。房州にて意休が蠱毒にあらはれて。妾も遂に殺されん
とせし折から。後瀬どの情にて。辛く命をたすかりしが。跡にて
聞ば彼意休はとくつらく殺されしとの風説あへ。其日頃をさぐるに

早稲田大学図書
牛込 逍遥
門 へ 13
號 3562
巻 5
早稲田大學図書館 昭34.6.3 受 藏書

忌日として。香華・手向る日とてもなく。されば今朝逢ぬれおもふ。
綾瀬どのゝと聞んとせしが。似たる人よとおもひなおし。言葉かけぬ
が此身の不幸。斯いふ事と努々しらざりしが。此竹藪に
来かゝりて。関屋どのに妾が殺されし先生金を助くるのひとつその恩
を報んもの。浮世に用なき身を恙なく。蕾の花を吹ちらし。一チ
度ならず再度ならずも。妾が命にかへしへ。何かれ宿世の約束に
や。未来は一蓮諸生ぞと。南無と唱へ。関屋も衛涙を
おさへ。さらば尼君よ心安く。早舟さのまゐりけるか。
其彼らが君の寵愛ありし。此主もなほ此方を知らぬものへいひなぐさむ。

殺害しやうとせしを。おもへども白玉が此身がつらさに
さしも妾がいもうと妹なれども命の親是有白玉其方が死る
故にこそ。妾は宗殺の悪名を逃れつれど。犬死なくしてあさがほ
によと流るゝものといふべく。悟業もなく又かへりゆかぬ周諒し
く。前後不覚に入へたりけり。早舟かさねて。さる歎きのひそかにえらく
亡夫の迷ひを誘引とせん法の書をもとしあり。妾も彼宝剣
を買ひえたく。後助六殿の在家を尋ね。こゝろしやうもつと仏となりて。
異なるに似つれども。関屋どのと云ひ。あるで二百両彼老人に渡
し。宝剣を取のがさんと立あがりて。総角少時よりなりしが。仏せさ

まふありかくつきかなき問ひごとふるゝめれど。白玉が生平のものがたり
に早舟さまと申す方由緑ありて。姉上とも思ひ侍りて仕へまゐらせし
が。顔容さへにもさらぬものゝひとつに所なく氏貞角に似てありけるが。
おなじ迄に其人のぞしとおもひつゝ故先に名残問しより。悲のうち
にも歎の歎きを手向けきとれば。実にも彼が言葉に違ふとも恰も
読に日ふあちなしね何地行方に生れあひ年は何才になりませ
ると問ひかけし人にむかしふみづき。二人の彭故うちまもるに雪故
めぐむく素服と色めれ小袖とふのゝ。着たるもしかならし做ば。
いづくと徳角といふ。いづくと知早舟へとこたふべうもあらねど。徳角

かさねて人の名残も心をこめて名残なのれとなん恥し
ぐる妾が捨子なく侍るされば早舟君にも若親類血族なりとも
も来るべからねども。忙しくちからも問ひかけるとひは秋に。
早舟も不審しく四男をそゝとつれなきも当才なく紫の紐
一まとめその身にそへてありしを言ひけれど。徳角大いに驚き。
守袋のうちよりも。紫の紐とり出。捨子の其人の形見なりとて。
妾をひろひとりし翁が家のかたり伝へしと紐さ時なりと。
ろげにおぼえあり是までに鎧につきて徳角とのいふものなり。
それは妾が名にしかりけしに候へ天故先にしかるを見付たるもや

妾が姉さんなりやと膝をすゝめて事を細やかに問ひのゝしるにぞ
さと九んで候とちかくとおもひし妾も御身とおなじ捨子なり。丹乃
うちにありしかば名を早舟とかいしども。かゝるゆゑ此紙と古めの守
袋より取出し。結びめよりの紙をあはせしも長短なく。御名と
さてはなりけり。人こもなきやうにおどろきて扨は姉妹なりと
へせしが。不思議なる御對面あくめりぬると言ひしが助六眉
をひそめ。かゝる證拠のあらんには姉妹なりすでにあられべくもさされ
ども二人の顔を熟みるに年の程も同じさまなるはいかにぞや
姉ゆへ々と言ひけり。一室のうちより声高く。其仔細を此公羽が

かくり紛せやへしくて立出ければ則十兵衛にぞありける

五 親子之奇偶

斯て十兵衛両人は互ひに御身のさたくありしぞ。二荒山の縁から
ありと問ふに二人声を同じくなし然れば若ふ十兵衛が黙然て
彼宝剣を抜くとみえしが。腹へぐさと突きてけり。ふたり何ゆへの
自害ぞと入てかけよりてとふに。十兵衛苦しき息をつぎ御身
ら二人こそ実子なり。此十兵衛が娘なりしと聞くより両人がさしよりて驚
きあきれの支に涙さしいだしながら。右と左にとりすがり。其父上が
何故ありて。かく御生害ふそかなしひのふと問ひければ十兵衛が眼

とゝへひかれ。これ昔は波多野佐々之丞利長といふ武士なりしが。往
永享のころ。主人足利左兵衛督持氏其子八幡権太郎義久。下
野国より義兵をおこし。安房国の城主。里見家基と合戦なせ
しが。持氏義久勝利なくして。下野国報国寺の境内にて御父子
とも生害ありけり。されども黄泉の御供と力に手をかけいれり。それ
よりく其の場をのがれ浪人の畑のまろうく。軍用金を守りて
早瀬村に来の女せとなる懐胎の妻桜戸を携へて。二荒山の麓
とゝまるあるじも。桜戸俄に患ひつきて二人の女子を産おとし彼れ
其所にてかく死去ぬ。所詮男の手ひとつにてかく。赤子の食育なんど

もちなし。後の證拠となりのやせんと。総角の紐をそへ二人とも小
をてつかが。親をなけれど子をそだつ。世の諺にちがひなかりく
健に成長しと。悲歎の涙とどめかね。女めらしく泣いたり。総角早舟を
何くれひらくかてもなく。数行の涙袖にあまり。唯ひさ泣に歎
くもりんや。助六を側近く来り。わが十三回忌の名は波多野
佐々之丞利長どのと申さん。足下蛇形丸の宝剣をあたらく。式
家に来り。また総角早舟が父なりと名乗り。自害し
て果のよるで小子なくて應え申さど。何等の由縁ぞ。詳に語
てのへと問ひかけふ。十余年なうち笑ひ生を得がく。死れ申とし。

縁故なくて腹きられべきかは。これが兄彼多賀村なる利久といふ者
足利里見合戦の刻。政男の父氷上東弥太に討れしなれバ。その
無念これとしるや。せつかく東弥太一ト太刀恨く。村はなれ幽
冤をそゝがんと。これより先にいふごとく。自殺なさんとすべき其場
をたち退き。密に房州へ赴き。便宜なるがふそのうちに東弥太
どのは病死なし。言休なる伊吹何某が実子なく孫となりたる
と。政男の祖父彼をあいしかり。氷上の家を食されど。東弥太が
血脈にあらねど。せめくる兄への分説に。政なる助六がねらふる
兄弟三人討んものと。ひしとも組踏。二人は非業の死なれ

とげく。残るは助六只一人。これ亦老たる雲雀が子。政男ハ此ものに
莽夫人なりしかバ。尋常の立合なひもなりがたしと。彼軍用金とめて。
此宝剣を買のとめ。すればなれ則餌となし。比兵とも未練とも。
いふ人を笑ふべし。賺かくしてうちはたさんと。此家に来りて首尾を
伺ひしなれバ。仇人とねらふ助六が。思ひかけざる総角なるが血を見
けし娘なり。近頃政男と異名して。花川戸の助六とも。総角の
助六ともいふなるをや。若も政男に怪我あるべしアレ助六を殺さく
はつれど。今却さみ祖着く紅粉と粧ふる。濡情なる総角
なりと。巷説といふなる。いろみ花女なればとて。涼く此世に

あるべきか。仇人を討バ娘も殺し。討ねバ兄への言訳なし。ぶあひに
絶ゆ子が生害。不便と思ひあつかふが総角と二世までもといひとげ
しめかるが。千部万部の経よりも。此十年が弔ひぞと。助六は
おもふバ総角も無益不同ならんより。妾が種性を思ひやりし。
かれ歎きは何事ぞ。いかなる過去の中ぞくぞや。父上といふは吾妻を
娶まいらせ昔こそ。今も悲しう侍ると打泣て早舟も諸ともに。いへ
ども妾が庵に来く。門に捕へらえし。危急をまぬがれしも。
つれせぬ親子の縁なりしが。今日もいかなる悪日ぞかし。後瀬の
ひとり父上までか。死なれしが悲しやと。ふたゝび涙にむせかへりし中にも関屋

楚曽平も。いと理におもなりと。袖をしぼりかねてなかりし木石
ならねバ助六もまた。臉をたれて。子は知らで親の恩はバ知らえ
と世の常言も宜なる哉。今までは仇人とつけねらひし助六に手を
あはせ。さめざめと総角が身の上いざまざまかたりし。我世もかゝ
らねば。妾が妻なりと忘れ。十年と共に苦しめるか。めぐるとはいじや
心なとし。夫婦に思ひをまする。総角早舟のことも
いまはやめると。力一文字にひとりしやるに。総角仇人の娘と知
つても。妻のむすびをなしのひし。助六どの謝して径に逃けれど
此宝剣賢に出にまかせよと。刀を抜て柿木のもとに。撞と倒れと

く息女あり。二人ハ父ともしたひつ。兄弟なれバ老て子なくとし。
園なれバ現在妹を殺しつれバ縁の助六事乎。悲さんつきね
六人が涙おとりける角田川の水もまさるべうみえ。へよりゆかるぶり
かゝる庵の外面に人の来れる気色なりとふおどろき早舟その人ハ
みえけれバ。近頃する者ともが不庵によりけり。門平ハかゝるあひだに旅の
すがたのおつゝ。是則別人にあらず先年義実公より宝剣二
ふり金受仕出をふかくハ。本領安堵さるべき旧墨附助六
方へもたら来りし。里見の老臣初鹿速水之助なり。助六忙れしく
上坐にすゝむれバ。速水之助のいふやう。先頃不意夫なる早舟との

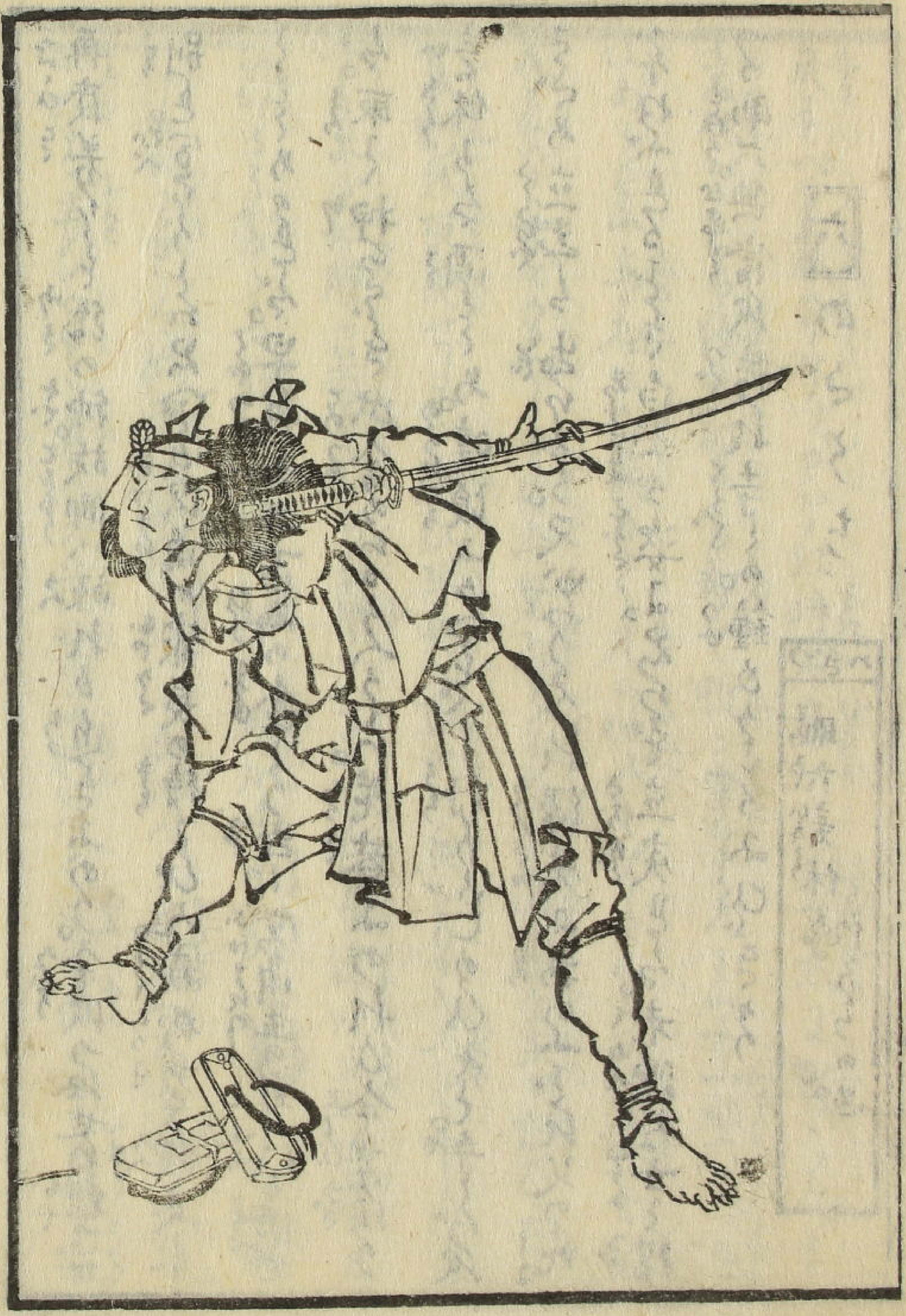
の庵にやどり。如此この事あらく言体が白主者門平ハかゝるまゝのまされ
幸とかねて謀君にもうたしめせし事なりけれバ言体が流悪を唯めて
聞しに業てらげらむ。三人の兄中なるもののなせんし。蛇形丸なる
ぞひ。前程きらむ所にふ自殺をとゝのせし事。すなはち時節至りぬ
く。里見の家をも押領せんと計策す。詳に白状なさひし故。
門平ハ疾彼地にて刑罪なしぬ言体が元来伊吹某が孤なる
新次。汝が祖父彼ハ食子となしつれなりけれバ。東弥太が実乃舎
弟にあらず。此度義実公命あらひ仲父聞の縁ハ切しあらで
のあらず。言体当地にあるこそ幸ひ。急ぎ彼を討て宝剣ハとら

戻るべき厳命なり。されバ時々房州に行く。鬼木にかけらるべき
言休いまだ死ぞや。汝に討るとも却て彼が幸ならん。しかるに助六大いに悦
び。めでたく主君の命なりと元の他人となりしめぐらが。言休を討
んと。いつも常とするべしと専斎閑居らが赤心。憩の用白玉が討のぞく。
宝剣を取戻せしも。なきひ早舟二百両の金をとりし。弐家に中むりしを。
十方なきが切腹の首尾。おそらくも帰く。かくなりしなりて。速水之助も慮に応
ひ。かくならバ。くるる疾言休を討く房州に来なべし。某よりあるに執
なすやん。ことなりて此由保美実公へ申あげんと。房州へおそ趣きけれ。
助六ハ弄びいそく。暮なバ花巷に赴きく。兄の仇なる言休を討。

再度着かくと錦の袖。故郷へ皈れも近きにあり。兄弟の知せぬ親の
別と富むかりとなり思へバ。総角の家長の待びん。疾柳巷へ皈るべし
とすゝめのとぞ。早舟ハ二百両の金を出し。総角主の追の代と渡せ
バ。取て押いたゞき此金のあるうへハ。花巷にあれも今宵限り
言休ある所を諦め。暁頃にくるをべし。討もらしのひそく弁をバ戒
さぞや立出けるが。又かのあれ。保先にありふさぎれ父の死
がれバ見るごとき。白玉が姿になりかなど立戻りける。未練な女と詈
つる助六無常を告れ。寺々の鐘もさゞくみひゞきたり

六 めでたし

つゞき
助六言休を仇うちの図



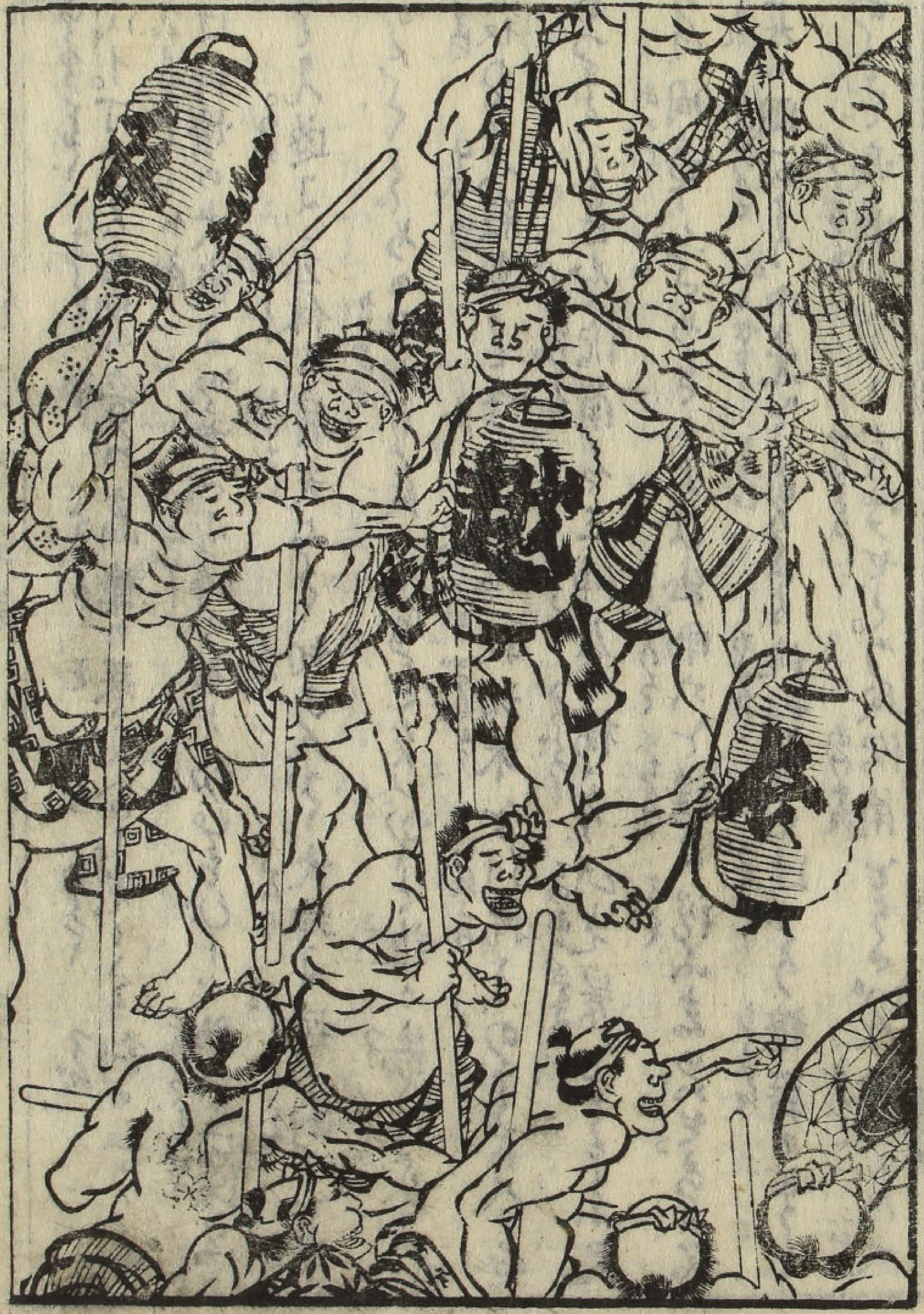
其夜も一休を三浦屋の樓にあつく。總角が難面にはらし別るに
扨女はむかへ雜の綱ひの傍き。夜も五更の頃おひ雜妓禿雜戸で
誘引娼妓は立出るが。奇なる哉路頭より鬼火飄漾とゆるぎ
めぐり。陽炎のごとく去りし瀬はただよふて行先にむらがり怖し
けふ一休が彼はうちて見せよと。偸盗の一休も歩はうるをと叓
めさりけど。少時躊躇なれに。雜妓雜戸を彼怨鬼の仰ぎとり
もなえされが。其由縁は志らねど。一休君にもる何はうちながめ
く。傍徨なふと問ふ一休もしめく公つき。此方の道を障る叓
あらんや。彼方のもちよう行るほじと立帰りける。花手橘は来ふ

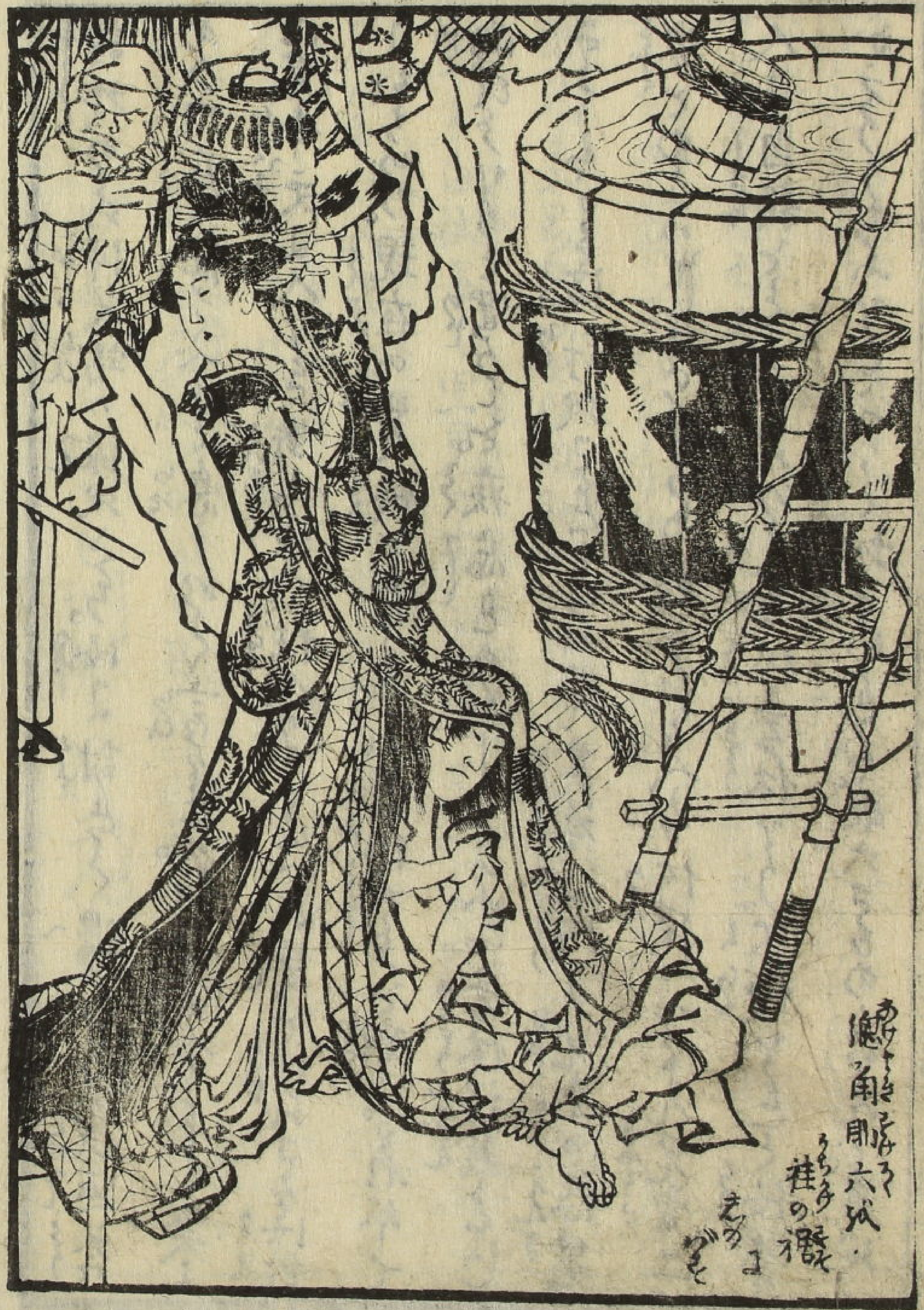
さげつ。珠數爪ぐりくとめまて来れ男あり。花巷ずいは合
しかくぎる出さちて。其人は見るに是則吾娼あふうん。一休に両人の
怨鬼まちあきされ。惘然としく居たりしが。珍をべかう人々に
向ひこれ見よ叓あらば吾ホ是より立案れべしといふよ。雜妓雜
戸を。又明日の夜志そ来ませと目くばせにて其言葉は皆ひつり
飯をぬ。一休も怨鬼をそこと眺めて。かの比吾娼たる此世に
ありしうちなる。ヨ君讒計にかゝり。現在の吾に殺されしは
狼狽者ぞかんや幽魂よりく。怨むとも及ばざる叓ぞかし。佩刀
とぬきさく切なへば。胴のごとくきえうせける。又後とくり見れば方

彿と人の傍徨あり。汝瀬川今言を振たるに言のうぢく。兄を殺せ
し不覚者ちぢまうんる兄巻と切くかゝれば姿をさらに消ゆ
ゆらぎに手を空く力なき合せし丁度なりける。意休うち驚き
熟つくる所も不知かけぬ助六なり。助六意休に向ひ此度円寺
門兵衛が白状して。里見の家を押領せんと。我身の謀叛件但に
あらはれ二人の兄の仇たれば。仲文甥の縁は断ち。これに討とり
まいらせ。義実公の疑念はれ。心よく勝負とぐべしと言ふ
ふ言はれて。意休何とうちまゐ門兵衛が白状する我謀叛
あらはれし上は。つゝまくも理なしこれ二人の兄の仇人と云へ義

證拠あるべし。仲文甥の縁はくちたり。汝に討れて得させんが。此返答
あるや。疾くへ步むべしと息まきつゝ言ければ。助六莞爾と打笑ひ
此身今天下に人なき街上にて。狂人のたぐひへ刃を貸すがごとく汝計
にあらず。現在の兄を殺せしこと。勇猛なりと嘲りつ。これにして
瀬川なりしと罵りしを。疾く忘れしとはいはぬ言休。憮然としばし
さくらうろ詮計はこれとのらせん其為に。彼は兄弟の怨鬼
姿とあらはせしものならめ。斯る者へを何程かつゝまん。兄弟二
人は自殺をとらせしは。いかにも此言休なり。不便なれども汝が為
かえうちにせんと。へ々と切くかゝれば。助六さもありなんと。身を

助六俠賣
淫婦ニ依テ
僅ニ手ヲ[illegible]
是レ[illegible]
[illegible]





閃しづくる白刃の音へ高樓の琴に合し光る剣のひかりや。辻行燈の火影にかゞやき、小晦がわど切むすびしが、助六手練や増さん遂に言休が肩尖かく切れば、大地に撲と倒れしを、衆かくくずれの力咽のをふつゝと刺さり、かくと誰か告ければ、人殺あり人殺ありと呼ばりて、棒乳切木を引提て、あたりの人々そあつまり来れば、総角は三浦屋の構より、光景をうかゞふ兄分ト。周章さわぎまろび出、助六と袂に縋りて、袖の下にかくまひ某の回向より、御免と詫して仇討なれば、辻ぎり狼藉の咎にてあらば、疾退くべしと言ふせず。かの総角とうるがひ雑戸乃大

勢が寄る此圍て。そばにつとひしめけるを見て、総角腹くし而て指しくありさまがし、讐仇討とひかる真空言にせよ。勇不肖なれども三浦屋の総角。そのかあげくる棒のさきが僕はうくも武総角はあるまじ。花巷は暗夜に聞しるべしと、晋を出れあけ言放ちて、源なる花料の言葉にやむ思ひきん。人を殺しけるうのみで、此所なりあるとも、又其所なぞぬべし、とく逃去ね。総角が一気あらね。助六を誘くて三浦屋に戻りけるに、三浦屋の家長も、総角より二百両の身代とりかさね、縁故と詳ふ聞えれ一度なしてぞ。助六が本意をとげしは、大に喜び花川戸へ人を

弛み。一仇了付は声かけせ盃とめぐらして助六と説き。夜あけ
ぬれば。花巷の余波と総角ハ。殺められ小袖手道具ハいくされ
やぐら。ふやこそまゐてこゝちあるべからず。総角とらしやれ妓女
ゐなりけり。斯て後助六総角ハ。専平関屋が許へ立かへりつゝも。
不日ゐりて安房国朝夷郡白濱にいたり。里見太郎義実公に謁
し奉り。二振の宝剣をさゝげけるに。義実公人々の赤心を感激し
て。助六ハ本領に増して知行を給ひ。専平も此侍らしく
召かへられたりけり。枯魚す水の活を得るごとく。喜び斜ならず。
殊に助六総角ハ中いとむつまじく。一男二女をもうけ。早舟を

助六が館の傍に庵をつくり。念仏ハかりし雲もなく真如の法の月を
ながめ。遂に大悟ある女傳となり。八十の齢をもて大往生をとげけ
るのさまを。今にいたるまで曲子にうたひ。戯場におやつれ助六総
角が昔がたりなり。かゝる古事ありけるを他の空言と嘲らざるが
空言は吐くも。勧善の一助となりなむと。老婆心なりけり

江戸紫三人兄弟四編 大尾

すまき五巻

和漢
西洋
書籍賣捌處

大阪心斎橋博労町角

群玉堂河内屋　岡田茂兵衛